

下田直春 著

『社会学的思考の基礎』

—社会学基礎理論の批判的展望—

〔本学社会学部教授
新泉社発行 A5版、三七六頁
定 価 二、八〇〇円〕

現在、わが国の社会学界は「現象学シヨツク」のさ中にあるといえる。ここ数年の間に現象学的社会学理論が急速に台頭し、とくにシヨツクとその周辺の理論に、研究者の関心が一斉に向けられた。それら諸理論に関しては、最近になってわが国でも数々の文献が発表されているが、それらの多くが外来理論の単なる紹介に過ぎず、それら諸理論を内在的に評価する迄に到っていないのが現状である。

本書は、そのサブタイトルにも示めされるように、現象学的社会学理論の単なる紹介の書ではない。シヨツクの理論——本書では「主観主義的 sociology」として範疇化されている——

に対しては真正面から検討が加られている。この点では、本書がわが国で初めてのものであり、その意義は小さくない。

さらに、本書は現象学的社会学理論に関する事柄のみを内容としてはいない。とくに最後の部分で展開されている社会構造論は、「意味連関の二項対照性理論」と名づけられ、従来のものとはまったく異なった構造認識を提示している。その意味からも、本書は、社会学のみならず、「社会」を研究の対象としている社会科学すべてに対する問題提起の書であるといえよう。

(社会学部副手 田辺義明)